

ライフスタイルとアイデンティティ——ユートピア的生活の現在, 過去, 未来

(世界思想社 2007 年)



宮入 恭平

僕が渡辺ゼミの門戸を叩いたのは、『ライフスタイルとアイデンティティ』が出版される4年前の2003年だった。その一番の目的は、学術的にポピュラー音楽を研究することだった。すでに30代の後半にさしかかっていた僕だが、名もなき売れないシンガーソングライターとして音楽とかかわっていたこともあり、自分自身の経験を活かしながら、改めて音楽を体系的に学ぼうと思いついたのだ。もちろん、渡辺先生がいわゆる音楽学の専門家でないことは百も承知だったし、楽譜すら読めない僕にしても、音楽学を学ぼうとしたわけではなかった。むしろ、音楽が社会とどのようにかかわっているのかを探求したかった。そして、それを学ぶには、社会学の文脈でロックミュージックを語る渡辺先生のゼミがうってつけだと考えたのだ。

そんな僕が渡辺ゼミで学ぶようになってから、たとえば音楽（ブルース・スプリングスティーン）や文学（村上春樹）といった、僕自身の趣味嗜好が渡辺先生と少なからず共通していることを知った。そのなかには、この本にも登場してくる、渡辺先生が愛してやまないボブ・ディランや、僕も好んで読んでいたポール・オースターも含まれていた。もっとも、渡辺先生は僕

よりもふたつほど上の世代（渡辺先生は1949年生まれ、僕は1968年生まれ）なので、同時代感覚で興味や関心を共有しているというわけではなかった。むしろ、僕の方があと追いで、渡辺先生の趣味嗜好と共通するものを追体験したに過ぎなかった。僕が大きな影響を受けたカウンターカルチャーという時代に、渡辺先生は青春時代を過ごしていた。そんな僕には、同時代的な実体験をした渡辺先生が羨ましく、もっと率直にいうならば、嫉ましくさえ思えた。

渡辺先生と僕の趣味嗜好をつなげる要因として、アメリカへの憧憬は大きいだろう。渡辺ゼミへ入る前の数年間、アメリカ（とはいってもハワイだが）で生活していたことから、アメリカ的な思考（や嗜好）が身につけていた僕は、渡辺先生の思考（や嗜好）に大きな共感を覚えた。第二次世界大戦後の社会で「ライフスタイル」や「アイデンティティ」を初めて自覚した世代のひとりとして、渡辺先生がアメリカへの憧憬を抱いたのは明らかなことだ（……と僕は勝手に思い込んでいる）。そんな渡辺先生から学んだのは、音楽や文学に関する知見もさることながら、僕が思い描いていたポピュラー音楽研究とは無関係と思えるものが多かった。改め

て考えてみると、僕は渡辺先生から、日常的に交わした音楽談義は別として、およそ研究としての音楽そのものについて学んだ記憶がない。もちろん、実際にはあったのかもしれないが、僕のなかではむしろ、音楽とは無関係なものを学んだ記憶の方が、いまなお鮮明に残っている。

あとになって納得したことだが、ポピュラー音楽研究では、個人的なものから社会的なものにいたるまで、音楽を取り巻く環境が重要になる。そしてときには、音楽そのものが副次的なものになることさえある。直接的にせよ間接的にせよ、渡辺先生から学んだことは、そうしたものの考え方だったような気がする。確かに、ポピュラー音楽を研究するためには、音楽そのものを掘り下げる作業が必須になる。もっとも、どれだけ音楽そのものを掘り下げたところで、音楽を取り巻く環境を考慮しなければ、そこで議論はうわべだけの薄っぺらなものになってしまう。もちろん、音楽学のように音楽そのものを探求するならまだしも、僕の目的は明らかにそれとは違うところにあった。つまり、音楽が社会とどのようにかかわっているのかということだ。そしていつしか、僕にとってのポピュラー音楽を研究することは、目的ではなく手段になっていた。

『ライフスタイルとアイデンティティ』には、僕が渡辺ゼミに入ってからの4年間に渡辺先生から学んだこと、つまり、渡辺先生のもの考え方が凝縮されている。それはまた、渡辺先生自身の「ライフスタイル」と「アイデンティティ」にまつわる物語といっても過言ではないだ

ろう。それはある意味で、理想的な生き方を指南する「自己啓発本」のようなものでもあり、渡辺先生自身の半生を綴った「自分史」のようなものでもある。だからといって、主観的でひとりよがりな個人の語りにはなっていない。社会学をはじめとする学術的な理論にもとづいた根拠の裏付けによって、単なる流行りの「自己啓発本」や「自分史」を超えた普遍性が付与されている。だからこそ、すでに出版から10年という歳月が流れているにもかかわらず、この本の内容が色褪せることはない。それどころか、個人的なものから社会的なものまでをも含めた、現在進行形で起こっているさまざまな問題が示唆的に描かれていることを目の当たりにするのだ。

そういえば、修士課程の修了を間近に控えた僕が博士課程に進みたいと相談したときに、渡辺先生は博士論文を提出しないことを条件に受け入れてくれたことを思い出した。限られた世界の人たちだけに向けた博士論文を書くよりも、多くの人たちに向けた文章を書いた方がいいのではないか、という意味だった。そんな渡辺先生の教えを忠実(?)に守り、僕は博士論文を書くことなく満期退学した。その代わりに、幸運なことにも、僕はこれまでに数冊の本を書きあげている。とはいえ、納得のいく文章を書くのは難しい。僕は僕自身の「ライフスタイル」や「アイデンティティ」にまつわる物語を綴らなければならないと痛感している。そして、渡辺先生にも、物語の続きを綴ってほしいと切望している。